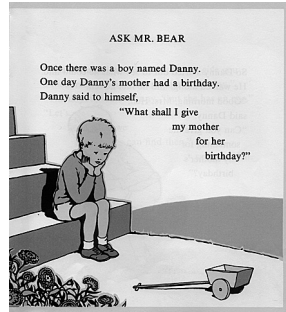


(図1 岩波版・表紙)



(図2 原書・最初のページ)



与えられていること、つまりダニーを慈しんでいる家族がいることが見てとれる。マジジョリー・フラックはこういう暗示が巧みで、『アングスとあひる』（瀬田貞二訳、一九七四年、福音館書店）では、スコッチテリアのアングスの飼い主は一度も顔を見ることがない。だが瀬田貞二が指摘するように、チラリと見えるきれいな花柄のソファから飼い主の暮らしぶりと愛情を垣間見ることができる。このページのダニーの頭のなかには、自分がこれまでにももらった贈り物が去来しているかもしれない。

さらに贈り物ができることは、成長して力があることの証しでもある。ダニーの贈り物探しは、この子が自分の力を証すという面をもっている。

ダニーと動物たち

ダニーはまずメンドリに出会い、「うみたての たまご

を ひとつ あげましよう」と提案されるが、「たまごなら、もう あるの」と言って断る。そこでメンドリもいっしょに贈り物探しに行くことにする。こうして次々に動物たちと出会い、その動物もいっしょにまた次の動物に会うのだが、動物はメンドリ↓ガチャウ↓ヤギ↓ヒツジ↓雌牛と、だんだんに大きくなっていく。動物の数も増えていくので、画面は徐々に動物たちでいっぱいになっていく。ダニーは「止まって（質問し）」「走り」「止まって（質問し）」「走り」をくり返す。一、二、一、二の単純なリズムが五回くり返されることと、そのたびに動物が大きくなり、数も増えるという漸増ぜんぞうのおもしろさ、それがこの絵本の肝所となる。「漸増」は絵本の楽しみの要素だが、まさしく漸増の楽しさのお手本のような一連の画面が続いている。また動物たちが大きくなっていくことは、ダニー本人が大きくなる存在であることを予兆させてもいるだろう。

少年が動物たちと走る様子からは、走れるようになった子どもの喜びが伝わってくるようだ。横道になるがこの絵本では、ダニーの右手と右足が同時に前に出る奇妙な走り方になっているところが（図1参照）、合計三箇所ある。これをフラックのまちがいと非難した画家がいたようで、それに対して瀬田貞二は「瑕瑾けがらである」とフラックをかばっている。フラックの描きまちがい、或いは意図したことがあったのかどうかは、残念ながらわからない。とはい